

2018年度 ボランティアセンター 年間活動報告書

～ボランティアセンター15周年記念～



フェリス女学院大学ボランティアセンター

2018年度ボランティアセンター年間活動報告書 目次

はじめに	ヒガ, マルセーロ センター長	1
I フェリス女学院大学ボランティアセンターの目的と事業		
1. 中期計画 (2017—2020)		2
2. 2018 年度活動をふりかえって		3
II 2018 年度活動報告		
学生主体の企画とコラボレーション		
【国際・平和人権】		
アンネのバラ (誕生日記念礼拝、植樹 15 周年記念礼拝)		7
ボランティアセンター設立 15 周年記念企画展示 (ボラセン x 附属図書館)		11
JICA 横浜海外移住資料館訪問		15
【教育支援】		
緑園東小学校 ふれあい学習サポート		16
【多文化共生のために】		
外国籍住民学習支援と出会い@多文化まちづくり工房		17
【地域と共に】		
第 16 回緑園新春コンサート		18
寿町炊き出し・夜回り・バザー		20
ふれあい “ザ” “いずみ軽スポーツ大会、横浜マラソン 2018 ボランティア 旭ジャズまつり、横濱ジャズプロムナード		21
障がい者施設、高齢者施設での演奏ボランティア		
【環境保護】		
使用済み切手・書き損じはがき収集		22
ペットボトルキャップ収集		
【人権・難民支援】		
世界難民支援募金		23
世界人権デー・イベント		24
【被災地支援】		
東日本大震災シンポジウム～「サマースクールプログラム@横浜」振り返り～		26
学生スタッフ研修会・イベント・インターンシッププログラム		
2018 年度 第 1 回 学生スタッフ研修会「ボランティアとは？」		28
” 第 2 回 学生スタッフ研修会 (ワークショップ「女性と防災」)		29
” 第 3 回 学生スタッフ研修会 (神戸)		30
大学ボランティアセンター 学生スタッフセミナー2018@大阪		33
大学ボランティアセンター 学生スタッフリーダーセミナー2019@大阪		
他大学ボラセン・ボラ室交流フォーラム (神奈川大学、横浜市立大学)		35
大学祭、ボランティアセンター展示		37
特別講演会「ボランティアと広報戦略」		38

学生のボランティア活動報告

(1) 学生ボランティア報告

【災害被災者支援】

東日本大震災被災地支援サマーキャンプ（山形県）	コミュニケーション学科 2年	39
サマーキャンプボランティア（山形県）	コミュニケーション学科 2年	41

【教育・子ども支援】

緑園東小学校ふれあい学習サポート	音楽芸術学科 3年	43
緑園東小学校ふれあい学習サポート	日本語日本文学科 2年	46
湘南台子ども館エッグドロップコンテスト	国際交流学科 1年	49

(2) NPO インターンシップ報告

地球市民 ACT かながわ/TPAK（国際協力）	国際交流学科 1年	50
--------------------------	-----------	----

(3) 国際機関実務体験プログラム報告

国際協力機構 JICA	国際交流学科 3年	53
日本貿易振興機構・横浜貿易情報センター JETRO	国際交流学科 2年	56
アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター	英語英米文学科 2年	60

Ⅲ ボランティアセンター資料

ボランティアセンター規程	63
ボランティアセンター運営委員会規程	65
ボランティアセンター運営方針	67
アンケート結果（ボランティアセンター来訪者）	68
ボランティア説明会 実施報告	71
2018 年度活動実績	73

おわりに

堀尾藍コーディネーター	75
-------------	----

表紙写真・裏表紙写真：アンネのバラ

はじめに

ボランティアセンター長 ヒガ, マルセーロ

今年度（2018年度）、当センターは設立15周年を迎えた。

本学は3つの学部、国際交流学部、文学部、音楽部があり、各学部の視点から本学の教育理念である“**For Others**”を学ぶ。ボランティアセンターは、大学に位置付けられており、各学部の教員が運営委員を務め、規約に基づいて運営がなされている。センターでは、学生スタッフが約30名所属し、授業のみではなく、ボランティアをとおして授業で学んだことを実践的に学ぶ場ともなっている。また、研修会等をとおして学際的な視野を拡充する目的を持つ。

私の専門は、移民の移動についてである。ボランティア活動を実施するにあたり、様々な文化を背景にした子ども達と出会う。簡単な挨拶であっても、子ども達の母語で簡単な挨拶をすると、子ども達の強張った顔が、一気にクシャクシャ、っと変化し、大きな笑顔に変わる。ボランティア活動は、「ボランティアする側」と「される側」がいるが、相手の母語を話す行為は、相手の立場を考慮し、相手の視点から物事に向き合っている、という姿勢の表れでもあり、言語は、とても重要な人間の手段（ツール）となっている。日本語学習のボランティアのプロジェクトでは、学生が海外のルーツを持つ子ども達に日本語を教授するが、一方で、会話をとおして、学生ボランティアが子ども達の母語を習得する機会がある。まさに、生きた「国際交流」である。学生時代にボランティアをとおして、様々な文化に触れることは、充実した学生生活のみではなく、卒業後の他者とのつながりでも大きく変化する、と考える。

2018年度は5月にJICA 移住資料館に学生スタッフを引率し、3月の学生スタッフ研修旅行では、外務省所管であった「海外移住と文化の交流センター（旧神戸移住センター）」を訪問し、学生と共に南米への移住の訓練所にて海外移住の歴史と移住者の想いを考えながら、日本と南米の文化交流、移住政策について知識を共有した。当センターが位置する横浜市と研修旅行先となった神戸市は、世界有数の港町であり、また、移民の舞台でもあり、この2つの街は、多くの共通点がある。今回の研修旅行では、夢を持ち、港に立った先人の想い、将来の可能性に対する学生スタッフの想いが重なり、センター長としての2年間（2017年4月～2019年3月）の職務について再考した。

歴代のセンター長の想いは同じで、学生には、ボランティア活動をとおして、他者への想い、慈しむ心を育んで頂きたい。

2019年3月

I. フェリス女学院大学ボランティアセンターの目的と事業 (2018年度)

1. 中期計画 (17-20PLAN)

中期計画は大学全体で取り組む「フェリス女学院大学 17-20PLAN」の中に位置づけられ、ボランティアセンターとしては、以下の計画を実施した。(優先順位による)

中期目標 中期計画名称	事業計画名称	2018年度の成果
キリスト教精神／ For Others の実践 建学の精神と教育理念のさらなる明確化・具体化	1. 学生スタッフ・コーディネーターの育成 2. インターンシッププログラムの充実 3. 一般学生に対するボランティアセンターの周知 4. 活動報告書の充実	1は研修会・研修旅行等とおして学生スタッフの育成を強化した。2は「国際機関実務体験プログラム」を通して、独立行政法人国際協力機構(JICA)や本プログラムにおける新規派遣先の独立行政法人日本貿易振興機構(JETRO)へ学生を派遣し、内容の充実を図った。3は、広報等の見直しを実施し、ボランティアセンターの利用者を増加させた。4は、学生のボランティア先が充実したことによって、報告書の内容もそれに比例した。
キリスト教精神／ For Others の実践 「女性のエンパワメント」構想の実施と検証	1. ジェンダー平等や女性の人権に関する意識の向上	元 独立行政法人国際協力機構 (JICA) パレスチナ所長の成瀬猛氏に「国際協力とジェンダー」をテーマにご講演をして頂き、発展途上国及び国内のジェンダー問題について学生の知識を深め、意識を向上させた。今後は、国際社会や国内、地域における女性に関する課題に対して、より学生の意識を向上させるために、フィールドも重視する。
学生支援・キャリア形成支援の充実に向けた取組 正課外活動支援	1. 地域連携事業の実施 2. 被災地支援活動の新規開拓 3. 他大学のボランティアセンターとのネットワーク拡充 4. 学生によるボランティア活動の広報ツール作成 5. サービスラーニングに関する調査・研究	1は、地域に根付いた NPO 法人「だんたんの樹」と共催で緑園新春コンサートを開催。また、障がい者施設「ひかりの園」とは、クッキーの共同開発や演奏ボランティアの派遣等で連携。2は、研修旅行をおして神戸大学大学院と被災地支援について議論を深め、また、学生スタッフによる東日本大震災の被災地支援を継続させた。3は学生スタッフ主催で、他大学との交流会を実施し、ボランティアセンター同士の交流を深めた。4は、日本福祉大学大学院客員教授の野田直人先生に「ボランティアと広報戦略」をテーマに講演及びワークショップを実施して頂き、ボランティア活動に対する広報ツールについて見直しを図った。5は学生が大学で学んだことを如何にして地域の課題解決に結びつけるか、研究を深めた。次年度の取り組みの一つである ESD(持続可能な開発のための教育(ESD:Education for Sustainable Development))へつなげる。

2. 2018年度活動をふりかえって

6月20日の「世界難民の日」にちなみ、ボランティアセンター学生スタッフが中心となり、6月18日（月）～22日（金）の期間中、学内にて募金活動を実施した。ご賛同下さった皆様に、心より感謝申し上げたい。募金額は13,826円になり、NPO法人難民支援協会に寄附した。

また、12月10日の「世界人権デー」に関する特別講演会「国際協力とジェンダー」を開催し、元独立行政法人国際協力機構（JICA）のパレスチナ所長である成瀬猛氏にご登壇をして頂き、肥沃な土地における女性の地位、文化について、国際協力の視点から、難民支援についてご講演して頂いた。また、本講演会は、国際交流学部の古内洋平准教授との授業連携とした。

学生スタッフの活動は、1、2年生が中心となり、大学祭などのイベントや、日々のミーティングの運営に力を入れてくれました。研修会や他大学ボラセンとの交流会も企画・参加し、センターのシフト（情報整理や相談対応のためにセンターに待機）には積極的に関わっていました。情報発信のための工夫として始めた Facebook や Twitter のサイトを継続的に活用している。

（1）センター実施業務

①一般学生へのボランティア活動に関する情報提供

a. 情報提供：大きく分けて、「ボランティアセンター学生スタッフの活動」「ボランティアセンターのプロジェクト」「関係団体等からのボランティア情報」の3種類の情報を提供している。方法としては、学内掲示、センター内で活動分野別団体ファイル、関連図書、資料、HP、SNS（情報提供者 ML に登録希望をした学生への定期的な情報提供等）などを通じて閲覧できる。

b. 説明会・講習会：4月～5月および10～11月に以下の説明会を開催した。（単位：名）

	参加者数	
	春	秋
ボランティアセンター・バリアフリー推進室合同説明会（2回）	110	40
ボランチ（5日間）	10	
緑園東小学校放課後ふれあい学習サポート・上白根中学校アシスタントティーチャー説明会	30	
NPO インターンシップ説明会	40	
国際機関実務体験プログラム説明会	50	20
海外スタディツアー説明会（CIEE）	60	20

②ボランティア活動の相談業務

a. 相談業務：常時コーディネーター、職員および学生スタッフ等が、来訪者の相談に応じている。開室時間 月～金 10時～17時。2018年度は87名の学生が来室した。

b. ボランティア活動科目履修の相談業務

今年度の履修登録者数は次の通り。(単位：名)

		前期	後期	活動内容
ボランティア活動 1 (45 時間)	英語英米文学科 3 年	1		緑園東小学校ふれあい学習サポート
	国際交流学科 1 年		1	NPO インターンシップ (地球市民 ACT かながわ)
	日本語日本文学科 2 年		1	緑園東小学校ふれあい学習サポート
	音楽芸術学科 3 年		1	緑園東小学校ふれあい学習サポート
ボランティア活動 2 (90 時間)	コミュニケーション学科 2 年	1		国際機関実務体験プログラム (YOKE)
	コミュニケーション学科 2 年	1		海外ボランティア (CIEE)
	日本語日本文学科 2 年		1	伊那谷子ども村サマーキャンプ
	国際交流学科 2 年		1	国際機関実務体験 (JETRO)
	国際交流学科 3 年		1	国際機関実務体験 (JICA)

c. 学生スタッフ・コーディネーターの活動支援と研修

今年度は、学生スタッフ 16 名、学生コーディネーター (2 年目以上) 16 名、合計 32 名が活動した。

③ ボランティア活動保険登録手続きの代行

手続き取扱い者数 79 名

④ 学内組織・ボランティア系団体との連携

神奈川大学学生ボランティア活動支援室・横浜市立大学ボランティア支援室来訪
他大学の活動を知り、お互いの問題点・解決策について話し合い、交流した。

⑤ 学外組織との連携

a. NPO インターンシッププログラム (2009 年度開始事業)

NPO 法人アクションポート横浜との連携によるインターンシッププログラムへの学生の参加。

2018 年度派遣は次の通り。(単位：名)

派遣先	短期	長期
NPO 法人 地球市民 ACT かながわ	1	
NPO 法人 アクションポート横浜	1	
NPO 法人 コミュニティデザインラボ	1	

b. 国際機関実務体験プログラム（2005年度開始事業）

公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）を通じて実施。横浜市内 5 大学（フェリス、明治学院大学、横浜国立大学、横浜市立大学、國學院大学）が参加しており、国際機関・国連機関での実務体験活動に学生を派遣。

2018 年度派遣は次の通り。（単位：名）

派遣先	夏期	春期
国際協力機構 JICA	1	
日本貿易振興機構・横浜貿易情報センター JETRO	1	
アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（IUC）		1

c. 泉区社会福祉協議会ボランティアセンター運営委員会
運営委員として参加。

d. 泉区社会福祉協議会主催による、障がい者との「ふれあい軽スポーツ大会」

アナウンスボランティアとして、日本語日本文学科 2 年 3 名。競技サポートボランティアとして、国際交流学科 1 年 1 名、音楽芸術学科 1 年 1 名が参加。

e. 演奏ボランティア

- ・障がい福祉施設（泉区・ひかりの園）で、クリスマスに音楽芸術学科 1 年 2 名が演奏。
- ・高齢者施設（都筑区・グループホーム都筑の丘）で、クリスマスに音楽芸術学科 1 年 2 名、演奏学科 1 年 2 名が演奏を行った。

⑥学外団体への寄付・募金

- ・認定 NPO 法人難民支援協会（世界難民支援募金）
- ・寿地区センター（タオル等のバザーへの寄付、炊き出しの食材寄付）
- ・寿地区センター（緑園新春コンサートで受付募金）
- ・世界の子どもにワクチンを日本委員会（「NPO ともにあゆむ」を介して、ペットボトルキャップの回収の収益を寄附）
- ・（認定）特定非営利活動法人シェア国際保健協力市民の会、特定非営利活動法人日本国際ボランティアセンター（国内外の使用済切手、未使用切手）

（2）学生スタッフ・コーディネーターの活動

- ①諸団体・組織からのボランティア募集情報やイベント情報などのチラシ、ニュースレター等の整理と掲示
- ②センター来訪学生への相談対応
- ③定例ミーティングの開催（担当制。アジェンダ作り、司会、書記等）
- ④外部団体や学内活動との連携
- ⑤ニュースレターの定期発行（6 月、10 月、1 月）

- ⑥研修会年3回実施（6月、9月、3月）
- ⑦大学ボランティアセンター学生スタッフセミナー（ユースビジョン主催、9月）に1年2名を派遣。
- ⑧大学ボランティアセンター学生スタッフリーダーセミナー（ユースビジョン主催、2月）に1年生4名を派遣。

（3）プロジェクト

2018年度は以下のプロジェクトを実施した。いずれも継続事業である。（事業開始年順）

- ① 第16回緑園新春コンサート（2003年度開始事業）（詳細18頁）

NPO 法人だんだんの樹（泉区・高齢者支援）との共催、泉区社会福祉協議会の後援として開催。学内では宗教センターの協力を得て開催された。地域との連携事業となっている。主に学生スタッフの1年生が中心となって、プロジェクトの企画立案、実施、評価を担当。
- ② アンネのバラプロジェクト（Peace from Anne）（2003年度開始事業）（7頁）

平和に関するプロジェクトとして、園芸ボランティアや記念礼拝があり、後者は宗教センターと連携して実施している。

また、ボランティアセンター設立15周年を記念関連イベントとして、NPO 法人ホロコースト教育資料センターよりパネル資料『アンネ・フランクと希望のバラ』をお借りし、附属図書館との連携として、企画展示を実施した。また、6月に上映会「アンネの日記第三章」を開催し、平和について学ぶ機会となった。
- ③ 緑園東小学校放課後ふれあい学習サポート（2004年度開始事業）（16頁）

地域の小学校との連携事業として実施。水曜日13時半～15時半、（木曜日14時半～15時半）に緑園東小学校図書室にて実施。参加学生は延べ87名、実施回数は26回。学習支援は、緑園東小学校の他、上白根中学校でのアシスタントティーチャーがある。地域の学習支援NPO などから多数のボランティア募集が来ており、学校教育現場からの支援ニーズの高まりを感じる。
- ④ 使用済み切手・書き損じはがきの収集と寄付（2008年度開始事業）（22頁）

（認定）特定非営利活動法人シェア国際保健協力市民の会、特定非営利活動法人日本国際ボランティアセンターへ寄付した。
- ⑤ ペットボトルキャップの収集（2008年度開始事業）（22頁）

キャンパスにてペットボトルを回収し、泉区のNPO 法人「ともにあゆむ」を介して、「世界の子どもにワクチンを日本委員会」からワクチンが提供される。
- ⑥ 寿町への支援（20頁）

今年度は、バザーへのタオル、炊き出しの食材などの寄付を実施。炊き出しにも参加した。

学生主体の企画とコラボレーション

アンネのバラ

今年もフェリス女学院大学の緑園キャンパスにアンネのバラが満開となった。アンネのバラは、本間慎元学長を通して黒川万千代氏（当時、ホロコースト教育資料センター副理事長・故）のご協力を頂き、バラ育苗家の山室建治氏より寄贈を受けて、2003年11月17日、植樹された。この年、廣石望初代ボランティアセンター長を中心に「アンネのバラ育成プロジェクト」が発足し、以来、学生たちの精力的なボランティア活動に支えられ、アンネのバラを育成している。



6.13 アンネのバラ/アンネ・フランクの誕生日記念礼拝



11.14 アンネのバラ植樹記念礼拝

「アンネのバラ」は、蕾の時は赤、開花すると黄金色になり、時間の経過とともにサーモンピンクに変色し、やがて更に濃いピンクに変色するという具合に、色が変わっていく。様々な色に変わるバラを「アンネのバラ」として選んだことには意味がある。

アンネは豊かな才能を秘めたまま戦争と民族差別のために、若くして命を奪われた。そんな彼女が生きていたなら、その才能を活かし、人生において幾つもの美しい花を咲かせたに違いない。多彩に変容する「アンネのバラ」には、多くの可能性を秘めたアンネを表現し、平和を祈るという、このバラを作出したベルギー人園芸家ヒッポリテ・デルフォルヘ氏の願いが込められている。

1971年、大槻道子という日本人がオットー・フランク氏と奇跡的に出会い、翌年のクリスマスにフランク氏からバラを分けて頂いた。その後、山室隆一氏にバラの増殖が託され、隆一氏が亡くなられた後はご子息建治氏がその栽培を受け継ぎ、アンネのバラは「戦争のない、平和な世界に」というアンネの願いと共に、日本全国に広まっている。



アンネバラのポプリ作成作業



礼拝後、ポプリを配布

【アンネのバラ礼拝】6月13日（水）緑園チャペルにて

奨励 国際交流学部3年

先月中旬、ボランティアセンターでは外部の方からアンネバラについての取材を受ける機会がありました。私は学生スタッフとして質問を受けたのですが、その時言われた「あなたにとってアンネ・フランクとはなんですか？」という問いかけは、私は私にとっての「アンネ・フランク」とはどんな存在なのかを改めて考えるきっかけとなりました。今日は、その「私にとってのアンネ」をすこし、お話しさせていただこうと思います。

アンネ・フランクは、第二次世界大戦中を生き延びた15歳のユダヤ系ドイツ人の少女です。1929年6月12日にドイツで生まれ、1945年3月5日強制収容所で亡くなりました。「アンネの日記」はアンネがホロコーストから逃れるため家族とそのほか数人のユダヤ人と潜んでいた隠れ家にて、ナチスに捕まるまでの約2年間を記録したものです。日記はアンネの死後、家族の中で唯一生存したアンネの父によって出版され、みなさんも知っての通り現在に至るまで世界中の人々に読まれ続ける大ベストセラーとなりました。そんな世界中の人が知るアンネ・フランクという少女ですが、私が彼女の日記を読み、彼女の人となりに触れて思ったことは、「アンネは高名な学者でも、政治家でもない、ふつうの女の子だったのだ」ということです。当たり前のことをと思われるかもしれませんが、だからこそ、アンネの言葉に私は心を動かされたのだと思うのです。日記には、私たちが生きる上で学びになることがたくさん書いてあります。この場ですべてをご紹介することはできませんが、あの言葉の数々が戦争の最中、いつ敵に見つかるとも知れない隠れ家で生まれたということを考えてみると、彼女は本当に聡明で心の強い女性だったのだと実感します。しかしそれと同時に、日記にはとても他愛のないことも書いてあるのです。母親への反発や、恋愛の悩み、現代の私たちも同じように抱える、些末で日常的なもろもろです。アンネは決して常に希望に満ち溢れていたわけではないし、なんの苦悩もなくいつも自分を疑わずにいられたわけでもありません。それではアンネの日記には、アンネという少女の言葉にはなぜこんなにも力があるのか。平和や希望へのメッセージを感じるのか。それは、アンネが困難に身を任せず、さまざまなことを考え続けたからだだと思います。彼女はいつも、身の周りの様々な事柄に心を触れさせ、感じ、考えました。触れたことがたとえ苦しみや悲しみであったとしても、それをそのままにせず、その感情の意味について、そしてそれをどう乗り越えるべきか、どう心の糧とすべきかについて思考することから逃げませんでした。先ほど言った母親への反発や恋愛についても、彼女は自分の中の負の感情をどうやって希望へと転じさせるかを常に模索していました。彼女の綴った日記にこんな一説があります。「ここでキティーに約束しましょう。どんなことがあっても、前向きに生きてみせると。涙をのんで、困難のなかに道を見いだしてみせると。」キティーというのは、彼女が自身の日記につけた愛称であり、アンネはしばしば日記を親愛なる友人として、約束をしたり、秘密を打ち明けたりしました。日記というのは赤裸々な過去の自分の姿です。アンネは自分が積み上げてきた自分自身に、「わたしは絶対にあきらめない」と誓ってみせたのでした。

私はこうした、アンネの決して思考を止めない姿勢が、苦しみに立ち向かう心の強さが有名な言葉の数々を生み出したのだと思います。考えるということは、時にとっても怖いことです。有耶無耶にして、視界の外に追いやってしまいたい現実に向き合うというのは、とても勇気のいることです。大学3年生という時期、就職活動を前にして今まで見ないようにしてきた自分自身の弱さ、甘さ、未熟さを突き付けられることもあり、きっとこれからも人生の様々な場面においてたくさんの壁にぶつかるのだらうと思います。しかしそんな時アンネのように、その困難や悲しみの先に希望見出そうと自ら思考し続けることが、

きっとこれからの自分を支えてくれるのだと思います。最後に、新約聖書マタイによる福音書 7章7節から8節をお読みします。「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。」

東京新聞社の掲載記事 (2018年5月12日朝刊)



▲満開のアンネと、住友さん(左)ボランティアセンター所属の学生(横浜市泉区で)

平和への願いが込められたバラの品種「アンネ」を育て、継承するフェリス女学院大(横浜市中区)の取り組みが十五周年を迎えた。バラ育苗家から寄贈されて緑園キャンパス(泉区)の花壇に植えた十株のうち、途中で一株は枯れたものの、九株が今春も満開になった。取り組みに参加する学生は「アンネを通して平和とは何かを考え、伝えていきたい」と意気込む。(志村彰太)

平和への願いつなぎ15年

フェリス女学院大のバラの花壇

バラのアンネは、第二次大戦中にドイツの強制収容所で病死したユダヤ系ドイツ人の少女アンネ・フランクにちなむ。アンネは収容される前、オランダで隠れ住んでいた日常を記しており、戦後に出版された「アンネの日記」で知られる。一九五九年、ベルギーの園芸家がアンネの父と面会。アンネが抱いていた平和への希望を知り、自ら開発した新品種にアンネの名前を冠した。春と秋に咲き、黄から赤に花の色が変化するのが特徴で、戦争や差別、迫害への反対と、平和への願いを込めた品種として世界中に広まっている。

アンネにちなむ9株満開

同キャンパスでは二〇〇三年の植樹以降、大学のボランティアセンターに所属する学生と園芸業者がアンネを手入れ。病気や変色などの不調を乗り越え、これまでつないできた。学生らは毎年、アンネ・フランクの誕生日の六月と植樹した十一月、アンネの日記の一部を読んだり、バラの生育状況を話したりする礼拝を学内で開いている。手入れをしている一人の住友亜莉沙さん(二〇一三年)は「十五年たって、アンネはボランティアセンターのシンボルになった。色鮮やかに咲くアンネを後輩たちに継承していく」と話した。

「戦争のない、平和な世界に」
との願いが込められた「アンネのバラ」が、フェリス女学院大学緑園キャンパス（横浜市泉区）で満開を迎えている一写真。

バラは「アンネの日記」で知られるユダヤ人少女、アンネ・フランクにちなんで名付けられ、2003年にキャンパス内に植樹された。つぼみの頃は赤、開花する

平和よ咲き誇れ

「アンネのバラ」満開

と黄色、満開の時期はピンクに変化する
のが特徴。ことしは、例年より早い先月
下旬に開花したという。

同大ではボランティアの学生が手入れ
し、後輩に受け継いでいる。花が咲いた
後の剪定を年2回欠かさず行うことで、
毎年、かれんな花が楽しめるという。

音楽学部1年の市村真由さん(18)は
「平和について考えるきっかけとなっ
ている」と花を手入れしていた。一般公開
はしていない。（鈴木 崇宏）



横浜ケーブルテレビジョンの取材

横浜ケーブルテレビジョンからアンネバラ育成プロジェクトについて取材があり、番組「地域情報便 じもっと!!」にて放送された。

横浜ケーブルテレビジョン

番組名：地域情報便 じもっと!!

放送チャンネル：YCV チャンネル①（地デジ 11 チャンネル）

放送日時：6月11日（月）17時～

ボランティアセンター設立 15 周年記念企画展示（ボラセン x 附属図書館）

NPO 法人ホロコースト教育資料センターより、パネル資料『アンネ・フランクと希望のバラ』をお借りして、附属図書館と連携し、ボランティアセンター設立 15 周年企画展示を行った。また、アンネ・フランク関連書籍コーナー設置のご協力を頂いた。多くの学生の目に留まり、改めて平和について考える機会となった。

期間：6月8日（金）～6月22日（金）

場所：附属図書館、CLA 棟 2 階（ボラセン、バリアフリー推進室、宗教センター）



パネル展示・アンネ関連書籍コーナー設置図書館

上映会『アンネの日記 第三章』

NPO 法人ホロコースト教育資料センターより、映画『アンネの日記 第三章』をお借りして、矢野久美子先生の授業「基礎演習」、齋藤孝滋先生の授業「R & R（入門ゼミ）」、及びヒガ，マルセーロ先生の授業「基礎演習」にご協力頂き、上映会『アンネの日記 第三章』を実施した。

日時：6月7日（木）4限 @2405 教室

<授業連携> 「基礎演習」（矢野久美子先生）

「R & R（入門ゼミ）」（齋藤孝滋先生）

「基礎演習」（ヒガ，マルセーロ先生）

参加者：計 32 名

学生スタッフ向け追加上映会：6月15日（金）3限 @2301 教室（参加者：2名）

【参加学生の声】

・アンネフランクについて、ホロコーストについて改めて知ることが出来て良かったです。争いをなくすことは難しいかもしれませんが、難民を増やさないためにも、私たち人類は歴史から学ばないといけないと思いました。当時の実際の映像や写真、体験者の話を見たり聞いたりすることはなかったので、本を通して知るよりも当時の様子を実感することができました。（国際交流学科 2 年）

・私たち人間は歴史から学ばなければなりません。弱い立場の人間が巻き込まれ、被害を受ける状況を変えるためにも、世界の人々が苦しんでいる人々の声に耳を傾け、勇気ある行動をとることが大切と感じました。今回の上映会がなければ、このような映像を見ることができなかつたと思うので、貴重な時間がもてて良かったです。

（国際交流学科 1 年）

【アンネのバラ植樹記念礼拝】 11月14日（水）緑園チャペルにて

奨励 日本語日本文学科 2年

皆さんは、日記をつけていますか？または、つけていたことはありますか？千年以上前から書かれてきた日記ですが、その性質は様々です。ある日記では、男が女のふりをして書いたり、またある時には会いに来てくれない夫を恨み、その愛情を子どもに向けた日記があったり、君主を讃える日記であったり。これらは平安文学の例ですが、もちろん中世や、それ以降の文学にも日記文学はたくさんあります。

今日、有名になった日記の中で、『アンネの日記』という本について聞いたことがある人は少なくないと思います。読んだ人もいるのではないのでしょうか。『アンネの日記』は1942年の6月から1944年8月までの約2年間に、書かれた日記です。ユダヤ人の少女、アンネ・フランクが、第二次世界大戦中に、ナチスの迫害を逃れ、「隠れ家」と呼ばれるジャム工場の事務所の奥の部屋で書き綴った日記です。日記を「キティ」と名付け、13歳から15歳までの青春の日々をせきららに書いた日記は、池上彰さんの『世界を変えた10冊の本』にも挙げられています。

アンネの生きたヨーロッパは、第2次世界大戦中で、ヒトラーの率いるナチス党がユダヤ人を迫害し、強制収容所などで虐殺を行っていた時代です。ユダヤ人であるアンネとその家族は、隠れ家で外にも出れず、夜には咳一つできない生活をしていました。その中で、「ジャーナリストになりたい」という夢を持ちながら、とても15歳とは思えない書きぶりで平和を願ったアンネの想いは今も世界中の人々に読まれ続けているのです。

私がアンネ・フランクという人物を知ったのは小学生の頃でした。当時、ピアノのレッスンの順番待ちの時間、世界の偉人の一生を描いた漫画が好きだったので、他の偉人と同じようにアンネ・フランクの漫画も読みました。この漫画は、一部『アンネの日記』から引用しながら、アンネ・フランクの一生について書いていました。一度目に読んだとき、本当に驚きました。今まで読んだ他の偉人の漫画では泣いたことがなかったのに、アンネ・フランクの漫画では自然と涙が流れてしまったからです。

アンネは、日記の中で、将来はジャーナリストになりたいとキティに語りかけ、死んでから後も生き続けたいと望みます。アンネは、今まで隠れ家で不自由がないとは言えないまでも、他のユダヤ人よりは隠れる場所や食べるものがあり、普通に暮らせていて、しかも素敵な夢まであったのに、強制収容所に入ることで死ぬことになってしまった、というのが幼かった私はつらく思ったのです。そして、アンネは、この世界に平和が訪れるようにと願います。この平和の願いは日記と共に多くの人によって考えられてきたのではないかと思います。

今日はアンネバラ植樹記念礼拝です。皆さんは、CLA棟の階段の下にバラの花が植えてあるのをご存知でしょうか。毎年6月と10月から11月に花が咲きます。15年前のこの時期に平和を願って第2次世界大戦中を生きたアンネ・フランクの名前の付けられたバラがこのフェリス女学院大学に植樹されました。

本日のチャペルサービスはその15周年の記念の年にあたる記念礼拝なのです。このアンネバラは、ベルギーの園芸家のヒッポリテ・デルフォルヘ氏によって品種改良された、成長につれて色が変わるバラです。蕾の時は赤、開花すると黄金色に変わり、時間の経過とともにサーモンピンクに変色し、やがてさらに濃いピンク色に変色するという具合に、色が変わっていきます。

この色が変わる花にアンネの名前が付けられたのには理由があります。アンネは豊かな才能を秘めたまま戦争と民族差別のために、若くして命を奪われました。そんな彼女が生

きていたなら、その才能を活かし、人生において幾つもの美しい花を咲かせたに違いありません。多彩に変容する「アンネのバラ」には、多くの可能性を秘めたアンネを表現し、平和を祈るというヒッポリテ・デルフォルヘ氏の願いが込められています。

旧約聖書イザヤ書 2 章 4 節にはこうあります。「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」神様は、争いのない平和な世界を望み、そのようになるために人々を導こうとします。

アンネは普通の暮らしのできる平和な世界を望みました。そして、私たちもその気持ちはあるのではないかと思います。ドラマや映画などで戦争の様子を再現した場面を見ても嫌だと感じますし、もしまた戦争が来て自分の大切な人がいなくなってしまうたらと考えると悲しくて仕方がありません。

しかし、現在も戦争はなくなることはなく、アンネのように苦しんでいる子どもがたくさんいます。もしかしたら現代は化学兵器も開発され、よりひどい状況かもしれません。日本は唯一原爆を落とされた国として核兵器や化学兵器の恐ろしさを発信していく必要があります。

しかし、実際に戦争を見たことがある日本人はこの場にはほとんどいないでしょう。終戦から 70 年が経ち、実際に戦争を体験した人は少なくなっています。現在戦争が行われているところに足を踏み入れることも難しいことです。私たちは戦争の実状を映像や写真を介してしか見ることはできません。その恐ろしさは間接的にしか体験できないのです。しかし、戦争を嫌だと思ふ気持ちを持ち、後世に伝えなくてはなりません。

平和の実現は簡単にはできません。多くの人々の努力があっても戦争はなくなっていないのです。私たちは簡単に実現しない平和を祈りながら、新たな争いが起こらないよう努力しなくてはならないと思います。心を豊かにし、平和を祈り、アンネの理想をバラと共に見つめていきたいと思います。



【アンネバラ育成スタッフの感想】

・フェリスにアンネバラがなければ、ボラセンスタッフとしてアンネバラに関わることがなければ、アンネの日記を読むことも、平和について想いを馳せることもなかったかもしれません。季節ごとにさまざまな色を見せてくれるアンネバラには、いつも癒しをもらっています。(音楽芸術学科 4年)

・ボランティアセンター15周年という節目の年に、学生スタッフとして在籍できたことをうれしく思っています。そして、15年間咲き続けているアンネのバラに出会えて本当に良かったと思います。アンネ・フランクは今の私よりもずっと若い頃からユダヤ人として迫害され、今の私と同じくらいの歳で亡くなりました。苦しい生活の中で、彼女はきっと希望を忘れませんでした。学内に咲くアンネバラを見ると彼女のそのような信念を思い出します。立派な花を咲かせるアンネバラは、今後もきっと咲きつづけ、世界中に彼女の守った希望を届け続けることでしょう。

(日本語日本文学科 2年)

【アンネバラ植樹 15周年に寄せて ～平和へのメッセージ～】

・人類の歴史で、平和ほど人々があこがれ続けたものはなかったということは、今の日本ではピンとこないことかもしれません。そんな中、平和にあこがれつつ短い生涯を終えた一人の少女を記念する礼拝が持たれます。美しく色づくアンネのバラの色は、アンネ・フランクの、そして平和を求めたすべての人々の願いの結晶のようではないでしょうか。「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」(マタイ 5・9)

(相澤宗教主事)

・いつもみんなの祈りと希望をつなげてくださってありがとうございます！ボランティアセンターの皆さんが、移りゆく世の中にあって本当に大事なことを見失わないように、そして、平和も自由も努力なしには手にすることができないものだと、励ましてくださることに感謝しています。

(宗教センター 荒井職員)

・2018年5月。今年も立派に咲いてくれてありがとう、感謝、感謝。季節の移り変わりに耐え頑張ってくれました。強風にあおられ枝が折れたこともあった、ごめん。でも新たに芽を吹き花が咲いた時は・・・よかった。バラの前に立ち何を思うかは人の心を察することはできないが優雅さ、美しさで心をつかみ、深くアンネバラを理解していただくよう頑張りましょう。これからも宜しくお願いします。

(a present from 植栽 to アンネバラ)

JICA 横浜海外移住資料館 訪問

【日程】5月26日(土) 10時半～14時(現地集合、現地解散)

【参加者】日本語日本文学科2年2名、コミュニケーション学科2年1名、
国際交流学科2年2名、国際交流学科1年2名、ヒガセンター長
計8名(学生7名、教員1名)

【訪問先】JICA 横浜海外移住資料館(神奈川県横浜市中区新港2-3-1)

【訪問の目的】(ヒガセンター長)

JICA 横浜 海外移住資料館を訪問し、日本の移住政策、横浜市の多文化共生の背景を知る。



JICA 横浜海外移住資料館にて

【参加学生の感想】

今回の海外移住資料館の見学を通して、日本から海外へ移住した人々の歴史を学ぶことができました。特に、在米日本人が様々な物資の不足する戦後日本へ向けて、ララ物資という支援物資を送っていたことが印象に残っています。彼らも戦時中は収容され、戦後も大変な思いをしてきたにも関わらず、物資が不足し困窮している日本の子どもたちを助けるために送り続けていたことに感動しました。また、今では当たり前となっている学校給食は、食料不足によりたくさんいた欠食児童の栄養を補うために、ララ物資で送られてきた粉ミルクやパンなどを学校で出したことから始まったと知り驚きました。赤レンガ倉庫のすぐ近くにララ物資の記念碑があることも知り、横浜の港が重要な役割を果たしていたのだと感じました。そのほかにも、横浜開港記念館や日本大通り、山下公園などを歩いて廻ったので、少し土地勘が分かった気がします。先生や先輩に大学のことを色々相談することもできたので良かったです。

(国際交流学科1年)

緑園東小学校 ふれあい学習サポート（ふれあい）

「緑園東小 ふれあい学習サポート」は、緑園東小学校からの依頼を受け、2004年度から学生たちが継続して取り組んでいるボランティアである。毎週水曜（木曜）、放課後の小学校の図書室で、子どもたちの学習サポートを行うチューターとして活動している。

フェリス女学院大学緑園キャンパス近くの緑園東小学校では、フェリス生の学習サポートボランティアを受け入れている。また市内の上白根中学校ではAT（アシスタント・ティーチャー）として学習支援を行う大学生の受け入れを行っている。

センターに初回来室するフェリス生に実施しているアンケートでも、子どもの教育に関するボランティアは、関心の高い活動分野である。毎年、あふれる熱意を持った学生たちが、子どもたちとのコミュニケーションを大切にしながら、地域の中の学習支援ボランティアの現場での活動を実施している。

活動日 : 水曜日 13:30～15:30、(木曜日 14:30～15:30)

場所 : 緑園東小学校 図書室

活動内容: チューターは、子どもたちが持参した学校の宿題や習い事の課題をサポートし、学習支援や居場所作りを提供。

例) 国語の漢字練習、算数の計算問題 等



【活動参加学生の声】

初めは不安もあり緊張していましたが、今ではこのボランティアをとっても楽しめています。小学生たちから「先生」と呼んでもらえることにやりがいを感じています。また、元気な小学生たちから毎回、元気ももらっています。勉強以外にたくさんのことを楽しそうに話してくれるので、話を聞いている私まで楽しくなります。難しさを感じることもありますが、このボランティアを通して、多くのことを勉強できているように感じます。このボランティアを始めて本当に良かったです。これからも、このボランティアに励もうと思います。（日本語日本文学科2年）

外国籍住民学習支援と出会い @多文化まちづくり工房

泉区「いちょう団地」には、ベトナム、カンボジア、ラオス、中国等、様々な国から来日された方々が居住している。「多文化まちづくり工房」（代表：早川秀樹氏）は、いちょう小学校コミュニティハウスでの日本語学習教室の開催、外国籍の子ども達を対象にした学習サポートの実施、外国籍住民の住宅入居相談（県へ協力）、外国籍住民が参加する多文化に対応する地域防災（泉区消防署と合同）など幅広い活動を実施している。その活動は、2009年11月「第40回博報賞」（財団法人 博報児童教育振興会）国際文化理解教育部門、2011年1月「国際交流基金地球市民賞」（独立行政法人 国際交流基金）にも選出されるなど、評価されている。

本学は、泉区に位置しており、同区にある「多文化まちづくり工房」へボランティア派遣を実施している。そのボランティアは、日本語教師を目指す学生のみではなく、国際協力に関心を持つ学生も参加する。また、ボランティア活動に参加したことにより、日本語教育の勉強を開始する学生もいる。

当センターの設立当初から、本学生に対する地域からのボランティア活動の期待が大きい。

多文化を背景とする子どもに対する学習支援は、日本人の学生にとっても国際文化交流や多文化理解教育としても位置付けられる。また、地域の課題の一つとして、外国人に対する防災教育がある。

横浜市立飯田北いちょう小学校

2014年度からいちょう小学校（多くの住民が外国にルーツをもつ、いちょう団地付近）と飯田北小学校が統合された。現在外国にルーツをもつ児童は全体の54%程度で、1年生については61%と、今後も外国の方々の割合が高くなると見込まれている。

第 16 回緑園新春コンサート

1月12日（土）、本学緑園キャンパスチャペルにて、「第16回緑園新春コンサート（共催・NPO 法人だんだんの樹）」を開催した。

本コンサートは、泉区社会福祉協議会による後援とし、毎年、地域の皆様、学内外の演奏家、本学の関係者と共に新春の慶びを共有させて頂いている。また、学内外の演奏者は、地域やフェリスに関係のある演奏家の皆様、「緑園なえば保育園の園児」の皆さん、フェリスの音楽学部の学生や卒業生がご出演して頂いている。

ご来場者数は166名、出演者及びスタッフ数92名、合計で258名の参加となった。来場者からは、「フェリスの学生さんを中心に運営されていて、とても気持ち良く参加出来ました」「毎年皆さんの演奏に元気をもらっています」「今年も楽しく地域の皆さんと交流させて頂きました」などの感想を頂いた。

本プログラムは、だんだんの樹の皆様のご協力のもと、ボランティアセンターの学生スタッフが主体となって運営し、地域の方々に音楽の魅力をお伝えする有難い機会となっている。本プログラムの深いご理解、ご協力について、この場をおかりして感謝申し上げます。

日時：2019年1月12日（土）14時開演（13時半開場）16時終演

場所：緑園キャンパスチャペル

<第1部>

♪1. ピアノ連弾 佐藤綾、原口麗子

ハチャトリアン：《仮面舞踏会》より〈ワルツ〉

♪2. 三味線アンサンブル 杵屋花邦と三花会（横浜市立学校教師グループ）

三絃二重奏曲《双律》（作曲：杵屋正邦） 三絃Ⅰ：杵屋花邦 岩崎千春 水越なお子
三絃三重奏曲《さくら》日本古謡 三絃Ⅱ：桃井美保 坂入操 渡部美和子

♪3. 声楽 田中翠

F. メンデルスゾーン：《歌の翼に》城所三紀（ピアノ）

映画『ハウルの動く城』より《世界の約束》（作詞：谷川俊太郎、作曲：木村弓、
編曲：高野麗子）

♪4. 合奏と合唱 緑園なえば保育園年長組のみなさん

合奏 ジブリメドレー《となりのトトロ》～《さんぽ》

ディズニーメドレー《小さな世界》～《ミッキーマウスマーチ》

合唱 《ぞうれっしゃよはしれ》

<第2部>

♪5. パイプオルガン 上河原路津子

D. ブクステフーデ：《プレリュード ハ長調》BuxWV 138

♪6. 声楽

《早春賦》（作詞：吉丸一昌、作曲：中田章）殿岡真衣、白井里栄

《前へ》（作詞、作曲：佐藤賢太郎）柴崎冴（ピアノ）

- ♪7.口笛とピアノのセッション 横浜サウンドストリーム 小國徹（口笛）、佐上智美（ピアノ）
《コン・テ・パルティエーロ》、《なごり雪》
- ♪8.声楽 大塚陽香、上山詩野
春の童謡メドレー
（《どこかで春が》～《春が来た》～《早春賦》～《朧月夜》～《花》） 三宅舞（ピアノ）
- ♪9.ソプラノ二重唱
オッフェンバック：オペラ《ホフマン物語》より〈ホフマンの船唄〉
ディガン：《おお シャンゼリゼ》川畑順子、福井早枝子
滝本泰三：《おてもやん・パラフレーズ》梅原三代子（ピアノ）
- ♪10.みんなで歌おう 小山順子、武川恵美子（ピアノ）
《みかんの花咲く丘》、《追憶》、《山小舎の灯》



コンサート会場入口に、横浜市中区寿地区の日雇い労働者の方々の、生活支援のための募金箱を設置し、ご協力を頂いた。集められた 32,020 円は、以下の団体に送った。
募金先：「日本基督教団神奈川教区 寿地区活動委員会」寿地区センター

【参加学生スタッフの感想】

今年で第 16 回となる緑園新春コンサートの総括をさせて頂くにあたり、準備の段階から本番上手くいくかどうか不安に駆られていました。今回は初めて 1 年生が主体となった行事で、先輩方に助けられながら本番に臨むことが出来ましたが、総括である私がしなければいけなかったこと、気づかなければいけなかったことなど反省点があります。当日天候には恵まれず、肌寒い一日となりましたが演奏者さんの温かい演奏で寒さも吹き飛んだように思えました。良いコンサートを作ることが出来たのは準備の段階からたくさんの方のご尽力があったからだと感謝しております。（国際交流学科 1 年）

今回、司会として運営に携わらせて頂きました。私自身、初めての本コンサートで当日まで把握できない事が多くかなり緊張しましたが、何年もお参加いただいているベテランの出演者様方、共催者様方にたくさん助けて頂きました。地域と連携して 16 年の温もりを肌で感じ、司会の際も、固すぎず、柔らかな空気感をイメージして努めました。また、立て看板のデザインも担当しましたが、演奏後に記念写真を看板と撮ってくださる方がたくさんおりました。来年に向けての反省会もし、さらに楽しんでいただけるものにするため日々活動していきたいと思えます。（音楽芸術学科 1 年）

寿町炊き出し・夜回り・バザー

寿町は、関内と石川町の間にある簡易宿泊所街である。ここには、失職し、居住地を失った約 6000 人の人々が居住しており、その内の 9 割以上が男性高齢者である。1 泊 2000 円の簡易宿泊所の小部屋に泊まるか、その費用のない人は、外にダンボールなどを敷いて夜を過ごしている。かつては外国からの移住労働者も多くいたが、不況の影響や、日本の出入国管理法による規制強化により、現在はその数が少なくなった。ここには、高齢者の集う「木楽な家」や、種々の障がい者福祉作業所があり、様々なボランティア活動が実施されている。

「寿地区センター」では、炊き出し、バザー、夜回りパトロール活動のほか、学生の啓発と研修のための「寿青年ゼミ」が年 2 回開催されている。

7 月に行われる「寿青年ゼミ」には、毎年、学生有志が参加している。「ゼミ」には、学生以外も参加しており、他者と接することで視野を広げることができる。また実際に路上生活者の方々と接することで、現代社会の課題を考える貴重な機会となっている。

【寿町バザー】

ボランティアセンターでは、未使用のタオル、石鹸、使い捨てカミソリを集め、日本キリスト教団寿地区センターに送り、現地の寿町バザーに協力している。

当センターの学生スタッフが作った収集箱は、センター内の学生カウンターの下にあり、随時、生活用品を募集している。

【寿町炊き出し】

炊き出しに教員、学生スタッフ 2 名で参加し、簡易宿泊所で生活されている方のお話をお聞きし、交流をはかった。炊き出しは毎週金曜日に行われている。



寿地区センターの場所

ふれあい“ザ”いずみ軽スポーツ大会

5月19日（土）、泉区社会福祉協議会主催「ふれあい“ザ”軽スポーツ大会」へ学生5名が参加し、障がい者との交流を目的としたアナウンス、競技サポートボランティアを実施し、地域貢献を行った。

アナウンスボランティア：日本語日本文学科2年3名

競技サポートボランティア：国際交流学科1年1名、音楽芸術学科1年1名

横浜マラソン2018 ボランティア（大学HP「フェリスブログより引用掲載」）

2018年10月5日、横浜マラソンに本学の学生9名、留学生7名がボランティアとして参加した。横浜マラソンでは、28,000人のランナーが走り、7000人以上のボランティアが競技のサポートに関わった。本学は、横浜マラソンでのボランティア活動に初めて参加しましたが、担当場所が多く観客とランナーが一体となる赤レンガ倉庫であったため、熱い歓声をたくさん体感することができた。

スポーツは、紛争地域や被災地における復興にも大きな役割を担い、他者との相互理解を図る手段として位置づけられている。

今回、参加した学生は太陽の暑い日差しの下、お互いを思いやりながら活動をし、また留学生と日本人の学生がお互いの文化について紹介しあう場面が何度もあった。

今後もボランティアセンターは、本学の教育理念である「For Others」を学ぶ機会を与えるため、ボランティア活動や国際協力など、さまざまなプロジェクトに取り組む。



音楽イベント運営・演奏ボランティア

開催日	団体／イベント	内容	参加者（楽器）
7月29日（日）	旭ジャズまつり	イベント運営	音楽芸術学科1年1名、音楽芸術学科2年1名 コミュニケーション学科2年1名
10月6日（土） ～7日（日）	横濱ジャズブルームナード	イベント運営	音楽芸術学科1年3名 日本語日本文学科2年1名
12月14日（金）	ひかりの園	クリスマス会での演奏	音楽芸術学科1年2名（ピアノ・声楽）
12月23日（日）	グループホーム都筑の丘	クリスマス会での演奏	音楽芸術学科1年2名（ピアノ・トランペット） 演奏学科1年2名（ピアノ・声楽）

使用済み切手・書き損じハガキ収集

ボランティアセンターでは使用済み切手、書き損じハガキなどを収集しており、本年度は、(認定) 特定非営利活動法人シェア国際保健協力市民の会、特定非営利活動法人日本国際ボランティアセンターへ寄附した。

切手の仕分けは学生スタッフが行っており、使用済み切手・書き損じハガキなどを送ることも「身近にできる国際ボランティア」となっている。継続的な取り組みが、社会への貢献につながる。宗教センター、山手事務室、教務課等、学内外の皆様から収集のご協力を頂いており、心から感謝申し上げたい。



使用済み切手仕分け作業

ペットボトルキャップ収集

回収したペットボトルキャップは、搬入先である NPO 法人「ともにあゆむ」を通じて、認定 NPO 法人「世界の子どもにワクチンを日本委員会 (JCV)」に寄付する。

集計日	回収数	ポリオワクチン	回収重量	CO2 削減量
2018年5月25日	17,114 個	19.9 人分	39.8kg	125kg
2018年7月20日	7,052 個	8.2 人分	16.4 kg	52kg
2018年10月19日	12,986 個	15.1 人分	30.2kg	95kg
累計	37,152 個	43.2 人分	86.4kg	272kg

<収集について>

*2kg (860 個) でポリオワクチン 1 人分が購入できる。

*1 kg (430 個) が焼却されると 3.15 kg の CO₂ が発生する。

(ペットボトルキャップが軽量化され、2012 年 9 月 1 日より 1kg=400 個より 430 個に

センターでは、通常設置している回収 BOX 以外に、大学祭で回収 BOX を特別に設置する等、収集に努めている。日頃から活動にご理解を頂き、感謝申し上げたい。

世界難民支援募金

法務省（2017）によると、日本における国内の難民申請者は、1万9628人となる（内、難民認定は20人）。しかし、難民の認定を申請する者は、日本への入国日、または日本にいる間に難民となった場合は、認識した日から60日以内に申請する「60日ルール」がある。多くの難民は、日本語が理解できないため、この制度を知らないのが現状である。6月20日は「世界難民の日」と制定されていることから、当日、学生スタッフを中心となり、学内にて募金活動を実施し、多くのご賛同者にご協力を頂いた。

<詳細>

日時：6月18日（月）～22日（金）昼休み

場所：緑園キャンパス内（食堂前など）

募金総額：13,826円（送金先：認定NPO法人 難民支援協会）



募金活動の準備



学内での募金活動

【企画学生の声】

私が難民支援募金の企画を行ったのは今年で2年目になります。高校生の時から難民について関心持ちましたが、1年次に大学の授業やボランティアセンターの活動を通して難民について学び、去年とはまた違った気持ちで企画を運営することができました。また、今年は多くの1年生にも協力していただきましたが、この活動を次の世代に繋げていくために私自身をもっと難民について深く学ばなければいけないな、と感じました。これからも難民の方々と向き合い、積極的に難民支援を行っていきたいです。（国際交流学科2年）

世界人権デー特別講演会 ～ボランティアセンター設立 15 周年イベント～

難民と女性の可能性中期計画『「4.女性のエンパワーメント支援」構想の実施と検証』のプロジェクトに位置づけたプロジェクトとして、国連の「人権デー（12月10日）」に関連した特別講演会を実施し、国際交流学部の古内洋平准教授の授業と連携した。

日時：12月10日（月）3限／場所：2405 教室

ゲスト：元 国際協力機構・JICA パレスチナ所長 成瀬猛氏

テーマ：「国際協力とジェンダー」

肥沃な土地における女性の地位、文化について一国際協力の視点から学ぶー

【概要】

長年、国際協力においてご活躍をされている成瀬氏は、発展途上国における女性の権利、女性のエンパワーメントについてプロジェクトを展開された。

この講演会では、先進国が持つ固定観念と現場での実情との齟齬（そご）について、アフリカのケニアや中東のパレスチナを事例としてご紹介して頂いた。

また、成瀬氏は、近年では、問題解決型学習「PBL型学習（Project Based Learning 型学習）」にも力を入れておられ、女性のエンパワーメントを考える上で現地のニーズに合った課題解決が重要であるご指摘された。



講師を囲んで懇親会

【参加学生アンケートより】

・元々国際協力に関心があり、海外の JICA を訪れたことをきっかけに JICA についても関心があったので、多くの課題を持つ中東で所長の経験がある方のお話が聞けて良かったです。ボランティアはなかなか行動に移せていないのですが、機会があれば挑戦したいと思いました。



人権デー・特別講演会

東日本大震災シンポジウム ～福島の子どもの養育

「サマースクールプログラム@横浜」の振り返り～

【日時】 8月4日（土）10時～16時 @2304 教室

【参加者】 学生スタッフ8名、サマースクールプログラム学生スタッフOG・6名、
初代コーディネーター、元職員、教職員7名（計23名）

【プログラム内容】

第一部 福島の現状と課題

- ・基調講演「医療 NPO からみた福島の復興と課題—福島支援の7年を振り返って見えてきたもの」佐藤真紀氏（NPO JIM-NET 事務局長）
- ・東日本大震災とボランティアセンター「サマースクールプログラム@横浜」を振り返って
小笠原公子氏（初代コーディネーター）
佐久間慧、奥海結衣、齊藤美月（学生スタッフ OG）

第二部 復興への課題～当事者のプロジェクト参加～

- ・「当事者として検証する 3.11 原発震災とボランティアの課題～福島の子どもの養育プロジェクトの活動から」西崎伸子教授（福島大学）
- ・東日本大震災被災地における学生の役割—自分自身のボランティア体験を元—
（音楽芸術学科4年 学生コーディネーター）
- ・宮城県の事例 堀尾 藍（コーディネーター）



【シンポジウム概要】

第一部では、佐藤真紀氏（JIM-NET 事務局長）が「医療からみた福島の復興と課題—福島支援の7年を振り返って見えてきたもの」と題した基調講演を行った。佐藤氏は、福島で震災直後から支援を開始しており、当時の写真と共に、被災者に寄り添った支援の重要性を主張された。小笠原公子初代コーディネーター及び学生スタッフ OG からは、ボランティアセンターが2011年から2016年まで実施した、福島県の子ども達を夏休みに横浜市に疎開させるプログラムの企画・立案の背景を説明し、プログラムの運用の背景、概要について報告を行った。

第二部では、西崎伸子教授（福島大学）から「当事者として検証する3.11原発支援とボランティアの課題～福島の子どもプロジェクトの活動から」と題として、「支援をする際には、現地の歴史や社会、文化等を理解することが大切」、「人々の自ら立ち上がろうとする力（エンパワメント）を支援する必要がある」と被災地に寄り添った支援の大切さについて指摘された。また、被災体験を言語化し後世に伝えていくことの大切さも指摘された。

次に学生スタッフから、他の東北地方におけるボランティア活動について、被災地支援は実際に現地に足を運ぶことが大切であるとの報告があった。

堀尾藍（コーディネーター）が今年3月に学生スタッフ研修旅行で視察した宮城県仙台市・東松山市の被災状況、復興について報告し、7月での同地域の出張報告をふまえて、伝統文化を大切にしたい支援、現地のニーズに適した支援の重要性について報告があった。

シンポジウムの発表者からは、いずれも、被災者と支援者との関係は対等のものであり、被災者自身が復興の主な担い手であるとの指摘があり、今後の被災地に対するボランティアセンターの役割について再考する良い機会となった。

シンポジウムに参加した学生からは「先輩方が企画運営していたプログラムの振り返りに参加することで、学ぶことが多かった」「今後、防災について、ボランティアセンターがどのように取り組むか考えるきっかけになった」という感想があった。

今年で15周年となるボランティアセンターは学生スタッフ主体でプロジェクトの企画・運営を実施しています。これからも当センターは、学生に学際的な学びの場を提供し、本学の教育理念「For Others」に基づいた活動を支援していきたい。（堀尾藍コーディネーター）

【参加学生の感想】

東北シンポジウムに参加してみて、実際に被災された方のお話を聞いて、言葉に表せないような感情、涙を必死にこらえていました。大切な人を失ってしまうなんて、想像しただけでも辛いです。今回のシンポジウムを通じて、自分がどれだけ東北の事を知らなかったのかを痛感しました。

震災当時、私は小学生だったので、ただただ大変なことが起きているとしか認知していませんでした。しかし、7年たった今でもまだまだ保養などの支援が追いつかず、復興が進まない実態を知りました。今回のシンポジウムがなければ、こんなにも防災について考える機会はなかったもので、参加してほんとに良かったです。

自分が実際に被害にあった時や、自分がボランティアへ行く時に今回学んだことを活かせるように行動したいです。今回学んだことをふまえて、そなエリア東京（防災体験学習施設）での学習もより良いものにしたいです。（音楽芸術学科1年）

学生スタッフ研修会

第1回研修会

本学緑園キャンパスにて、テーマをボランティアとした「2018年度・第1回学生スタッフ研修会」を実施した。研修会では、ボランティア活動を始めるとあって大切なボランティア理論について学び、ボランティアセンターの役割、学生スタッフの役割と活動などについて確認をした。また本年度がボランティアセンター設立15周年になるため、関連イベントについて議論した。

日時：2018年6月30日（土）9時～15時（場所：緑園キャンパス 2305 教室）

研修会のテーマ：「ボランティアとは？」

参加学生数：新学生スタッフ7名、学生コーディネーター4名、教職員4名（計15名）

スケジュール	
午前	ボランティアについてワークショップ ボラセンについて（活動紹介、学生スタッフの役割）
午後	ボランティアセンター設立15周年関連イベント ～東日本大震災に関するシンポジウム～について



第 2 回研修会

9月20日(木)、本学緑園キャンパスにて第2回研修会を実施した。研修会では、防災や減災に関してPower Point等を使用して理論を学び、ワークショップや地域の消防士による救命救急講習をとおして実践を学んだ。

また、一部の学生スタッフが9月17日(月)に東京臨海広域防災公園(そなエリア東京)にて防災や減災に関して見学しており、研修会ではその体験を共有した。

そして、大学祭でのボランティアセンターの展示内容、ボランティアセンター主催の説明会など、後期の活動内容について議論し、今後の展開について見直しを行った。

2018年9月17日(月) 10時～16時/場所：東京臨海広域防災公園(そなエリア東京)

参加者：学生スタッフ5名

2018年9月20日(木) 9時半～16時/場所：緑園キャンパス 2403 教室

参加者：学生スタッフ5名

午前：救命入門コース受講(泉消防署の方から)

午後：「防災」ワークショップ、東京臨海広域防災公園(そなエリア東京)訪問報告

大学祭について、ボランティアセンター後期スケジュールについて



救命入門コース

【参加学生の声】

9月1日防災の日になみ、9月17日にそなエリア東京(防災体験学習施設)を学生スタッフ5名で見学しました。この施設では、震災発生直後を再現した街を歩くことができますが、それを現実に起こりうることだと受け入れがたく、映画のセットのようだとさえ思いました。私たち人間は、災害と直接戦うことはできません。この半年でも日本の様々な場所が揺れました。自然災害を起こさないようにできないのなら、私たちは災害に対する知識を持ち、準備をしなければなりません。自分の身は自分で守る。災害時、他人を頼りにすることは難しく、周りも皆、被災者なのです。防災に「後で」は存在しない。生き残れるかどうかは自分次第なのであると感じました。

また、9月20日に泉消防署の方に緑園キャンパスへお越し頂き、救命入門コース(胸骨圧迫やAEDの取扱いなど)を受講しました。新聞紙で簡易スリッパやビニール袋で紙おむつを作るなど、防災ワークショップも行いました。大学祭での情報提供も予定しています。

(音楽芸術学科1年)

第3回研修会 —研修旅行 in 神戸—

1995年1月17日に阪神淡路大震災が発生してから今年で23年になる。多くの尊い命が失われ、6,434人が犠牲となった。当センターでは、3月1日（金）から3月3日（日）まで、大震災から復興をした兵庫県における防災に関するプロジェクトを視察し、持続的な防災教育のあり方について学んだ。また、本研修旅行の視察では、「兵庫県枠組み（HFA）」から「仙台防災枠組み（2015-2030）」の変遷について知識及び見地を深めた。また、災害時により弱い立場となる恐れがある母子や外国人等に対する防災に関する取り組みについて視察した。

<内容>

- 1) 阪神淡路大震災から復興した兵庫県及び国際機関による防災教育について学ぶ。
- 2) 兵庫県及び宮城県における被災地との大学間の連携を視察する。
- 3) 横浜市と同様、移民の受け入れ先であった神戸市の歴史を学び、横浜と比較をしながら、国際都市の特性、移民の背景、文化について考察する。

日時：2019年3月1日（金）～3月3日（日）2泊3日

研修地：兵庫県神戸市 等（宿泊場所：センチュリオンホテル神戸駅前）

訪問先：兵庫県庁、JICA関西・国際防災研修センター、神戸大学 他

参加者：学生スタッフ6名、教職員2名、計8名

<行程>

3月1日（金）

午前 兵庫県復興支援課 東日本大震災・熊本地震の復興について

午後 JICA 関西 国際防災研修センター（DRLC）

海外移住と文化の交流センター（移住センター）

3月2日（土）

午前 人と防災未来センター

午後 選択制見学（ひょうごボランティアプラザなど）

3月3日（日）

午前 神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター、
神戸大学ボランティア支援室と交流

午後 自由見学（公益財団法人大阪国際交流センターなど）

【参加学生の声】

・今回、「減災」というキーワードをよく耳にしました。阪神淡路大震災で多くの人が地域住民による救助で助かったとお聞きし、自分を含む小さなコミュニティから防災の取り組みを始め、継続し、備えることが大切だと感じました。しかし、防災や復興支援、その他、卒業という期限のある学生達で行う活動は、継続させていくには大きな壁があり、今年後輩ができるので、単純に年月だけでなく、内容の改善を含め、良い形で繋いでいけるよう考えていきたいと思えます。さらに、JICA 関西の訪問の際、ODA にまつわる活動を詳しく知り、私にもできないことがないかと青年海外協力隊への興味、関心が高まっています。隣にいる友達から広い世界まで、様々なコミュニティに目を向け、大小関係なく誰かのためを思ってボランティアセンターに所属を継続したいと思います。(音楽芸術学科 1 年)

・私は、今回の研修で初めて神戸に行きました。阪神淡路大震災で大きな被害を受けた場所でしたが、商店街などは活気に満ちていました。人と未来防災センターでは、震災の記憶を後世に残していくための資料がたくさんあり、実際に震災を経験した方のお話を聞くこともできました。近年、地震だけでも各地で被害が相次いでいたため、阪神淡路大震災が随分昔のことに感じていましたが、語り部の方の当時のお話を聞いてそうではないと思うようになりました。語り部の方は、携帯電話にホイッスルと懐中電灯のストラップをつけていて、家でも災害時に備えた用意をしておっしゃっていました。震災の後には同じように備えている人は多いと思いますが、時間が経つとともに日常に慣れてしまい、災害への備えがおろそかになってしまうと思います。また、備えを用意していてもいざというときに使えなければ意味がありません。このお話を聞いて、災害に備えることの意味を再認識することができました。今回学んだことを、自分の周りの人から広めていきたいです。(国際交流学部 1 年)

・今回の研修では、私たちスタッフは阪神淡路大震災を知らない世代ということもあり、実際に阪神淡路大震災がどのようなものであったのか、復興支援、復興後の兵庫県全体の活動などを学ばせていただきました。様々な施設に足を運びましたが、スタッフの方々が口を揃えておっしゃっていたのが「瓦礫の下に埋もれて助かった人の 8 割は近所の人の助けで救われた人だった」ということです。近年では地域との関わり合いが薄くなっていますが、地域間、ご近所同士での密接な関係を築くことがいざという時の助けになるということが分かりました。

また、人間は何か起こって失うものがないと、行動に移すことができないということを痛感しました。阪神淡路大震災以前は「兵庫県は絶対に地震がこない」という根拠のない自信から何も対策されていなかったようです。ですが、この経験を生かして、その後の災害支援に大きく貢献することができたということが印象深く心に残っています。私自身も熊本地震を経験しています。この研修を通して、忘れかけていた当時の状況、日本全国の人が復興の手助けをしてくれたことを思い出し、改めて忘れてはいけな経験、後世に伝えていかなければいけないことだと感じました。(国際交流学科 2 年)

・今回の研修旅行では、地震ということテーマに様々な場所を訪れました。兵庫県庁では、災害対策の方のお話を聴き、対策、支援ということから日本だけでなく、国際交流も行われていることを知りました。実際に街を歩いた際も、津波避難情報掲示板が身近にあるなど、自分の住む地域との違いも感じました。

防災未来センターでは、リアルな映像にとっても衝撃を受けました。また、語り部の方のお話を聴けたこと、職員、ボランティアの方が熱心に当時の地震について、これからの地震についてたくさん説明して下さったことがとても印象的でした。自然災害を防ぐことは出来ないが、被害を少なくすることはできる、“減災”ということをしかりと頭に入れ、日常を見直そうと思いました。(国際交流学科 1年)



兵庫県庁災害対策本部



神戸大学訪問

大学ボランティアセンター学生スタッフセミナー2018 参加報告

年に2回（基礎編・応用編）、特定非営利活動法人ユースビジョン主催で、全国の大学ボランティアセンターの学生スタッフを対象に研修会が実施されており、当センターの学生スタッフも毎回数名が参加している。本年度の基礎編には、学生スタッフ2名（音楽芸術学科1年・2名）が研修会に参加した。

他大学と共にボランティアセンターの理念や活動内容を共有し、議論することで、所属するボランティアセンターのプロジェクトに関して客観的に分析することが可となる。

日程：2018年9月4日（火）～5日（水）

場所：大阪市立青少年文化創造ステーション KOKOPLAZA

主催：特定非営利活動法人ユースビジョン

テーマ：「全国の学生スタッフとの交流や学習で、センターも自分も一歩先へ！」

【参加学生スタッフの声】

私は今回のセミナーで大きく2つのことを学びました。1つは、コーディネートのやり方です。一般学生に寄り添って、ボランティアとの壁を無くして貰えるように、明るく接することが大切だと学びました。また、最新のボランティア情報やチラシに乗ってない情報、例えばボランティア先の雰囲気を知ることで、より一般学生が求めるボランティアに近いものを勧めることが出来ます。また、人前で発表する機会も多く、コミュニケーション能力を上げることも出来、参加して良かったと思いました。（音楽芸術学科1年）



大学ボランティアセンター学生リーダーセミナー2019 参加報告

上記の応用編として、大学ボランティアセンターにおける学生リーダーを対象とした研修会が実施され、当センターからは、学生スタッフ4名（国際交流学科1年・3名、音楽芸術学科・1名）が参加した。

日程：2019年2月12日（火）～13日（水）

場所：大阪市立青少年文化創造ステーション KOKOPLAZA

主催：特定非営利活動法人ユースビジョン

セミナーテーマ：「新年度に向けて、よりよい組織づくりを学ぼう！他大学とつながろう！」

【参加学生スタッフの声】

・「リーダーとは何か、そもそも“組織“とは何なのか」。ワークショップや講義を通して、今のフェリスのボランティアセンターに足りないものにたくさん気づくことができた良い機会となりました。国内のさまざまな大学からリーダーが集まり、情報交換をしたことで、センターそれぞれの在り方を知り、良い会議の仕方、シフトの管理、情報の共有・可視化など、課題は山積みだと身にしみているところです。また、“組織“とは共通の目的を持ち、役割の分担があり、そして持続性があるもので、この一年を振り返ってみると、“組織“と切り切れない状態が多々あったように思います。スタッフが気持ちよく活動でき、一般学生にもより分かりやすく利用しやすい組織にするため、しばらくは各々のプロジェクトの前に、センターの在り方を改善することに重きを置いて活動したいと考えています。新しく生まれ変わるチャンスは今だと強く認識しています。(音楽芸術学科 1年)

・今回のユースビジョン主催の研修会を通して、私は、リーダーという立場のあり方や、考え方に様々なものがあるということ学びました。

‘リーダーに求めるもの‘という順位付けをグループで行うワークショップの時、それぞれが重視、優先するポイントが異なり、なかなかコンセンサスまでに至ることが出来ませんでした。人の意見を聴き、その意見をまとめる、納得のいく結論を出すということの難しさを感じ、今後の課題として話し合いの進め方など、試行錯誤していきたいと思いました。

また今回の開催地が関西ということで、関西の大学がほとんどであったことから、話し合いや、発表の形に新鮮さがあったように感じました。発表に笑いが含まれており、聴き手を飽きさせない工夫ということも学ぶことが出来て良かったです。

普段とは違った交流、学びを通して、これからのボランティア活動へ繋げようと学生スタッフの一人として改めて思いました。(国際交流学科 1年)



他大学ボラセン・ボラ室交流フォーラム

神奈川大学学生ボランティア活動支援室、横浜市立大学ボランティア支援室との交流

日程：2018年8月10日（金）／場所：横浜市立大学

参加者：音楽芸術学科4年（1名）、日本語日本文学科2年（1名）、
国際交流学科2年（1名）、音楽芸術学科1年（1名）

【参加学生の報告】（日本語日本文学科2年）

2018年8月10日、横浜市立大学にて、今回で3回目となる他大学交流会を実施した。参加大学はフェリス女学院大学（4年生・1名、2年生・1名）、横浜市立大学（4年生・1名、2年生・1名）、神奈川大学（1名）である。

<8月以前の現状分析>

過去2回の他大学交流会で、2年生以上の学生同士の交流が深まったと考えられる。また、ボラセン・ボラ室内の問題点を洗い出し、その解決策を考えることで、自身の大学でやることが見えてきた。4月に新入生が各大学で入学し、新しい問題点、視点も出てきている。

<目的>

- ・各大学の新スタッフに対して、他大学交流に関する情報を共有し、今後に役立ててもらおう。
- ・新入生、上級生どちらにも役立つ、企画作りの「いろは」を学び、交流する。

<企画の概要/コンセプト>

他大学交流会を実際に作ってみる

<得られる効果>

新入生・上級生との交流ができる。他大学交流の更なる発展を目指す。
企画作りを学ぶことで今後のボラセン・ボラ室での活動に役立てる。

<目標>

新入生が、他大学の良いところを学び、今後活かすことができるようになるまで知る。企画作りの難しさなどを知ってもらい、今後の活動に活かす。

企画中の良かった点

SNS ツールを利用するだけでなく、一度企画のために京浜急行線能見台駅のガストで内容について話し合えたことが企画を大きく進めることに影響した。また、話し合いが詰まった時にすぐに4年生の先輩方に意見を求めることで、比較的スムーズに進めることができたと感じている。

企画中の反省点

今回の企画は、2018年度入学生（現1年生）が初めて参加する会であり、1年生からも企画者を募った。しかし、後々にも影響するが、交流会を始めた趣旨を上手く伝えることができず、意見がまとまらなかった。また、「経験のため」と、1年生を多く企画メンバーに入れてしまったことも意見がまとまらない要因になってしまった。今後の企画では中心と

なるメンバーの人数をしぼり、一人一人が責任をもって参加できるようにしたい。

当日のタイムスケジュール

- 9:00 企画者集合・準備、参加者集合、アイスブレイク
- 10:30 大学紹介・質問対応
- 11:10 企画概要説明
- 11:30 グループディスカッション（問題点・解決策について話し合う）
- 12:00 昼休み（横浜市ボラ室見学）
- 13:00 グループディスカッション・発表準備
- 15:00 発表（1グループ持ち時間10分。質問対応含む）
- 15:30 各大学でフィードバック、総括
- 16:30 終了

参加者は全員で16人であり、うち5名がフェリス生である（報告者含む）。当日は3グループに分かれ、各グループで対象者やどのような企画にするかを話し合いながら模造紙でプレゼンテーションを行った。

当日の良かった点

企画は概ね成功したと考える。企画の時点において設定した目標が達成したからだ。初めて企画を考えるという1年生がいる中で、企画を作るプロセスを他大学の学生と協力しながら体験し、楽しんでもらうことができた。また、他大学の動向を最初に発表してもらうことで、企画作りの中でも時期の決定などに役立った。次回も参加者によっては他大学のことを知らないため、違う形でも取り入れて行けたらと思う。

当日の反省点

企画の反省にもつながると思うが、参加者が少ないことが反省点である。要因として2つの理由が考えられる。日程を夏休みの半ばに設定してしまったことで、地方出身の学生が帰省してしまったため、参加人数が少なかった。2つ目は交流会全体の目標設定があいまいになっており、その意義を特に一年生に伝えられなかったことである。この回の目標はしっかりと設定したつもりであったが、企画者の中でも、最終的に5年後などに交流会をどのように続けていきたいのかという明確なビジョンがなく、その意義を伝えられなかったため、参加に意義を見出せない学生が多くいたように思う。10月頃に、次回の春休みの交流会企画について動き出した時、今まで企画として参加していた神奈川大学から今後の交流会企画には参加しないという意思表示を受けた。交流会の意義が大学間、学年間でしっかりと共有されていれば、継続して参加してもらえたことであろう。

次回の企画について

次回の企画では、新しく参加する大学を増やしたいと考えている。大学への勧誘も含め、少しずつ着実な企画をしていきたい。そのために今回の良かった点であった逆算した企画計画を継続し、反省点として挙げられる目標をしっかりと見なおして設定し、参加する学生のニーズを考慮しながら企画していきたい。

大学祭

11月3日から4日まで(2日間)、本学にて大学祭が開催された。ボランティアセンターでは、各プロジェクトの活動報告として、展示を実施し、アフリカの布を使用したボタン作りのワークショップ、「社会福祉法人ル・プリ ひかりの園」とのコラボクッキーの販売等を実施した。フェリスの特徴である「アンネバラ」や、地域の小学生の学習支援を行う「ふれあい学習サポート」、毎年、年明けに地域と共同で開催している「新春緑園コンサート」、特定非営利活動法人 JIM-NET のイラクの小児がん患者を支援するチョコ募金紹介等を展示し、学生スタッフが来訪者に対して活動詳細を説明し、私達の日々の活動について理解して頂く良い機会となった。

また、防災関連のプロジェクト紹介として、災害時の避難所の体験ワークショップを実施し、有事の防災や減災について情報を提供し、日頃からの防災意識を高めることの重要性について共有した。

■展示

- ・ボランティアセンターの活動紹介(パネル)

アンネのバラ、緑園東小学校ふれあい学習サポート、被災地支援ボランティア、緑園新春コンサート、防災ワークショップ(避難所体験など)、特定非営利活動法人 JIM-NET のチョコ募金紹介(イラクの小児がん)、日本語学習支援、難民

- ・ニュースレター(学生スタッフが編集・発行)
- ・ボランティアセンターの年間活動報告書

■ビデオ上映

学生スタッフが撮影・編集したビデオを上映しました。

- ・2016年度第3回学生スタッフ沖縄研修会
- ・2017年度第3回学生スタッフ東北研修会
- ・ボランティアセンター設立15周年記念アンネバラ展
- ・ボランティアセンター活動紹介



■販売

- ・ボランティアセンター設立15周年記念クッキー販売(社会福祉法人ル・プリ ひかりの園とコラボ)

【学生スタッフの声】(音楽芸術学科1年)

*私が今年の大学祭で「ひかりの園」とのコラボでクッキーを販売としたいと考えたのは、以前、フェリスで「ひかりの園」さんのクッキーを売ったことがあるというお話を聞き、地域との関わりを復活させたかったからです。また、私は普段から「ひかりの園」さんでボランティアをさせて頂いているのですが、学内で「ひかりの園」さんを知っている人はあまり多くはありません。そこで、もっと「ひかりの園」さんの活動を広めたいと思い、今回の企画をしました。クッキーは大好評で、完売することが出来ました。(音楽芸術学科1年)

「ボランティアと広報戦略」講演会

中期計画『「For Others」の理念に基づく人材育成事業の充実』に位置づけたプロジェクトとして、「ボランティアと広報戦略」をテーマとした講演会を実施し、授業「ボランティア論」（渡邊義昭先生）と連携した。

日時：11月28日（水）5限／場所：2403 教室

ゲスト：日本福祉大学大学院客員教授・国際協力コンサルタント 野田直人氏

テーマ：「ボランティアと広報戦略」

【講演の概要】

本講演会では、長年、アフリカを中心として国際協力の専門家としてご活躍をされている野田直人先生にご登壇頂き、国際協力（ボランティア）の分野において、どのような広報活動がなされているか、理論と実践において知識を深めた。

講演の内容として、広報戦略は、「情報を受け取る対象者」を設定し、その対象者がどのような情報を必要としており、また、その対象者に合わせてどのようなツールで情報提供を行うか、分析する必要があるとし、ご講演による理論のみではなく、ワークショップをとおして実践についても学んだ。



【参加学生の声】

・情報を調べなくても勝手に入ってくる時代なので、何か企画した時も勝手に人が集まってくると思いがちですが、例えばボランティアをする人を募集しようとした時に、実際はそう簡単に人は集まらないこともあります。その上で募集するときは、SNSであればその方法、誰に向けて発信するのか、年齢や性別、何に興味がある人への情報なのか、ということが重要であると分かりました。

2018 年度ボランティア説明会 実施報告

<春のボランティア説明会>

第1回 4月3日（火）16：00～16：30@キダーホール 参加者数 120 名、アンケート回収数 112

第2回 4月4日（水）11：15～11：45@グリーンホール 参加者数 60 名、アンケート回収数 52

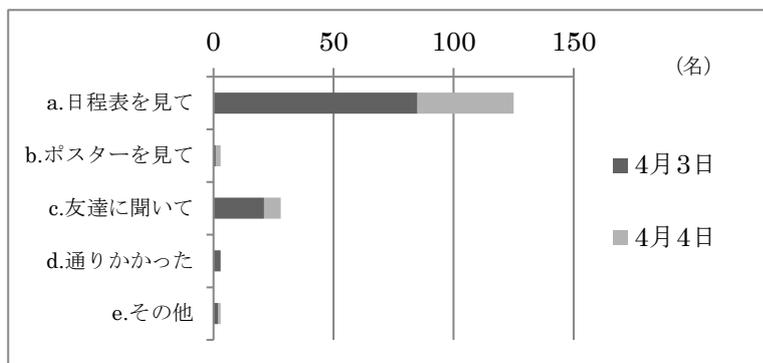
本年度も、バリアフリー推進室と合同で説明会を実施した。

<秋のボランティア講習会>

10月3日（水）12：20～13：00@キダーホール 参加者数 35 名、アンケート回収数 5

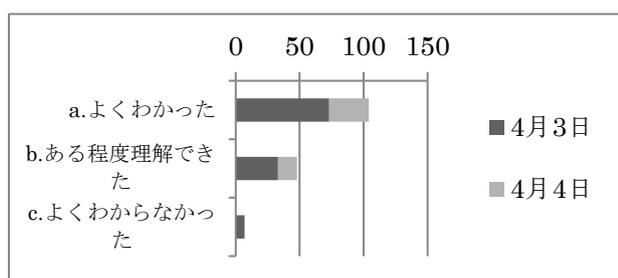
実施日	学年	英文	日文	コミュ	国際	演奏	音芸	記入計	無記入	回収数計
4月3日	1年	25	30	20	34	0	1	110	0	112
	2年	0	0	0	0	1	0	1		
	3年	0	0	0	0	0	0	0		
	4年	1	0	0	0	0	0	1		
4月4日	1年	4	5	10	18	1	5	43	2	52
	2年	1	0	0	1	1	0	3		
	3年	0	0	1	0	1	0	2		
	4年	0	0	0	1	1	0	2		
10月3日	1年	0	0	1	0	0	0	1	0	5
	2年	1	1	0	1	0	0	3		
	3年	0	0	0	0	0	1	1		
	4年	0	0	0	0	0	0	0		
合計		32	36	32	55	5	7	167	2	169

1.今日の説明会はどのように知りましたか？

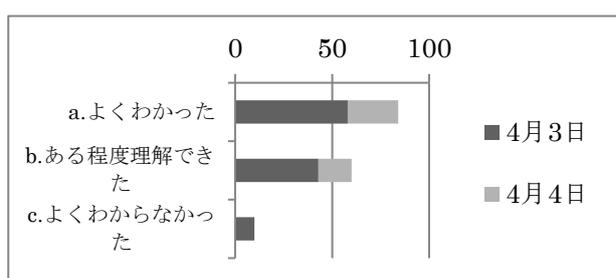


2.今日の説明会に参加して、理解できましたか？

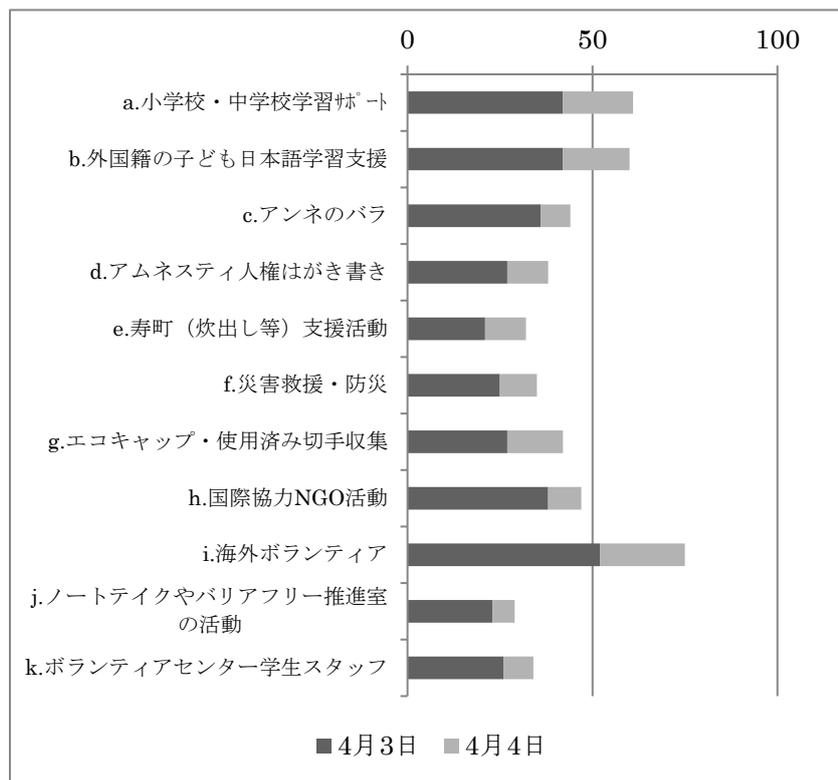
【ボランティアとは？】



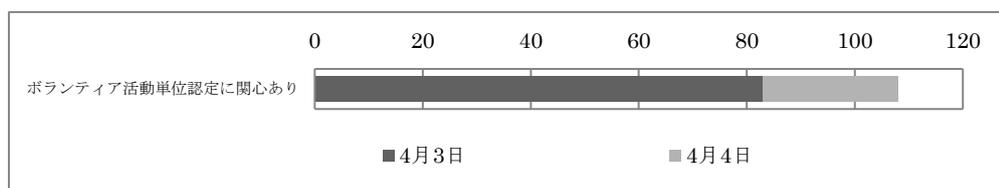
【ボランティアセンターについて】



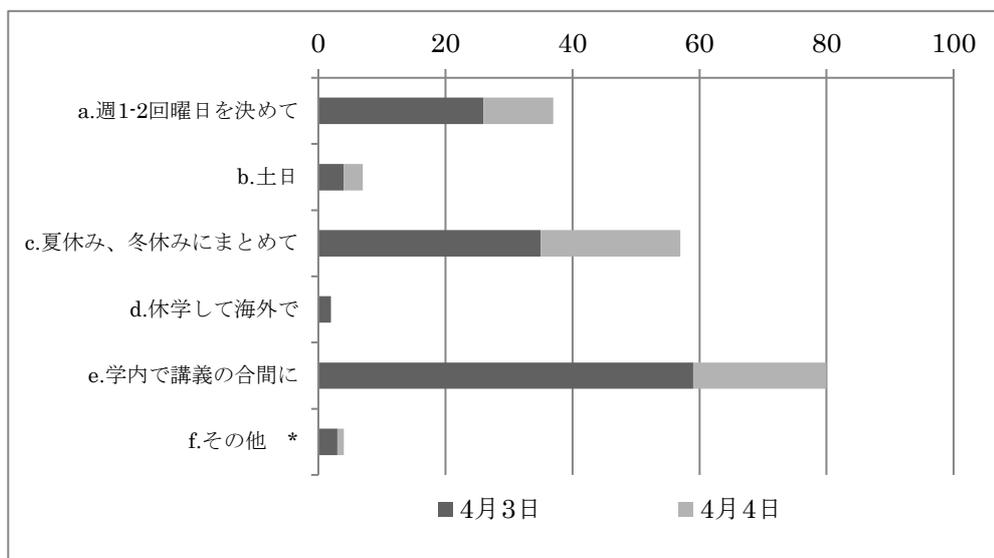
3.紹介されたプロジェクトで興味を持った活動、参加してみたい活動はありますか？（複数回答可）



4. ボランティア活動の単位認定について、関心はありますか？



5. いつボランティア活動をしたいですか？



2018 年度ボランティアセンター活動実績

- 4月3日(火) 第1回ボランティア説明会(バリアフリー推進室合同)
4月4日(水) 第2回ボランティア説明会(バリアフリー推進室合同)
4月水曜・木曜・金曜 ボランチ(ボラセン de ランチ)
4月17日(火) フェリスステージ参加
4月18日(水) 緑園東小ふれあい学習サポート・上白根中学校 AT 説明会
4月25日(水) 授業「ボランティア論」学生コーディネーター ゲスト参加
4月26日(木)・27日(金) 新ボラセン学生スタッフ顔合わせ会
- 5月火曜・木曜・金曜 ボランチ(ボラセン de ランチ)
5月7日(月) CIEE(国際教育交換協議会) 海外ボランティア説明会
5月9日(水) 夏期国際機関実務体験プログラム説明会
5月16日(月) NPO インターンシッププログラム説明会
5月26日(土) 学生スタッフ交流会 JICA 横浜 海外移住資料館訪問
- 6月7日(木) 4限 上映会『アンネの日記 第三章』(2405 教室)
6月8日(金)～22日(金) パネル展『アンネ・フランクと希望のバラ』(図書館と連携)
アンネバラ写真展(ボランティアセンター)
6月13日(水) アンネのバラ礼拝
6月18日(月)～22日(金) 世界難民支援募金
6月27日(水) 第1回ボランティアセンター運営委員会
6月30日(土) 第1回学生スタッフ研修会(緑園キャンパス)
- 8月4日(土) 東日本大震災シンポジウム「サマースクールプログラム@横浜」の振り返り
8月29日(水) 夏期国際機関実務体験プログラム中間研修会
- 9月7日(金) 夏期国際機関実務体験プログラム最終報告会
9月17日(月) そなエリア東京(防災体験学習施設)見学
9月20日(木) 第2回学生スタッフ研修会(防災について)

10月3日(水) 秋のボランティアセンター説明会・夏ボラ報告会

10月10日(水) 春期国際機関実務体験プログラム説明会

10月27日(土) NPO 短期インターン活動報告会

11月3日(土)～4日(日) 大学祭参加「ひかりの園」クッキー販売
防災ワークショップ

11月14日(水) アンネのバラ植樹記念礼拝

11月21日(水) CIEE 海外ボランティア説明会

11月22日(木) 4限 授業「国際交流への招待」学生スタッフ ゲスト参加

11月28日(水) 5限 講演会「ボランティアと広報戦略」

12月10日(月) 3限 世界人権デー・特別講演会「国際協力とジェンダー」

1月12日(土) 第16回緑園新春コンサート

1月16日(水) 3限 授業「企業と倫理」学生スタッフ ゲスト参加

2月12日(火)～13日(水) 大学ボランティアセンター学生スタッフリーダーセミナー

3月1日(金)～3日(日) 第3回学生スタッフ研修会

3月13日(水) 春期国際機関実務体験プログラム最終報告会

おわりに

堀尾藍コーディネーター

本年度（2018年度）、当センターは設立15周年を迎えた。当センターは、学生スタッフがプロジェクトの企画・運営・評価を実施しており、学生が活動をとおしてPCM（Project Cycle Management）を習得できる。

2018年度の研修旅行は、「持続可能な防災教育」をテーマとし、中期計画『「For Others」の理念に人材育成事業の充実』のプロジェクトに位置付けた。1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災から復興をした兵庫県では、被災経験をもとに防災教育が強化されており、我々は、兵庫県庁防災対策本部やJICA関西国際防災研修センター（DRLC）を視察し、有事の際に、どのように地域住民と共に減災に努めるか、考察をした。また、神戸大学大学院人間発達環境学研究科に訪問し、被災者を主体とした持続的な防災教育のあり方について議論した。昨年（2017）年度は、東日本大震災の被災地である宮城県仙台市及び東松島市に訪れ、多くの小学生が救出された荒浜小学校や被災者で組織化された「語りべ」による伝承によって防災教育を実施する地域住民による復興のあり方を視察した。震災後、何年もかけてインフラ整備等、復興支援がなされるが、被災者の心の傷は深く、傾聴といったボランティアが継続的に必要とされる。

我々は、2年間にわたり、研修旅行先として被災地を訪問したが、「兵庫県枠組み」から「仙台防災枠組み」の変遷について知識及び見地を深めることを目的とし、参加した学生スタッフからは、有事の際の対策について、議論を深められたという意見が多くみられた。

学生が提案したアイデアを実際に実現できるようにマネジメントを行うのが私の仕事である。社会に出ると、失敗を恐れ、可能性の芽が出る前に摘まれることもある。起案が良い評価につながらなかったとしても、失敗から学ぶことの方が成功したプロジェクトよりも大きな糧を得られると考える。

卒業後、学生スタッフが自立した女性として国際社会や日本社会において活躍できるよう、第一線でご活躍されている国際機関や外務省、行政、地域住民と連携しながら、今後も学生の育成に努めたい。

2019年3月



フェリス女学院大学ボランティアセンター

**緑園キャンパス CLA 棟 2 階
〒245-8650
横浜市泉区緑園 4-5-3**

TEL:045-812-8462

FAX:045-812-8467

<https://www.ferris.ac.jp/information/campus-center/volunteer-center/>

